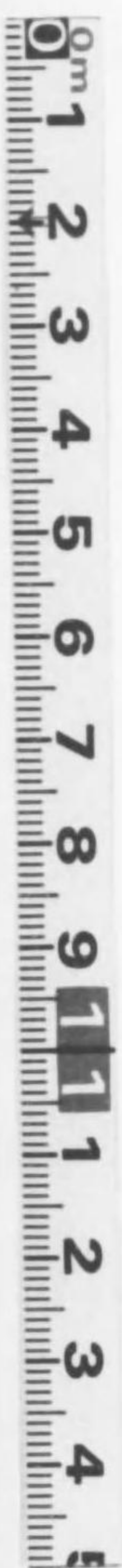


傳藤原公任金澤本萬葉集 天

301
10

帙入



始



傳藤原公任書

金澤本萬葉集

釋文

天

六

301-10.



金澤本萬葉集解題並釋文

題

平安朝時代に書寫された萬葉集は略十種にも及び、その中の桂本、
 監本、金澤本、天治本、元暦本を五種萬葉集と呼んで居る。
 上の書寫の萬葉集を金澤本と稱して居るのは、金澤の前田家に傳
 つた故か、又は金澤文庫にあつた爲めか、その由來する所は明でな
 いが、とにかくもとは前田家に傳へられたもので、明治四十三年、
 明治天皇が同邸に行幸遊ばされた時に献上せられ、今は帝國御物と
 なつて居る。前田家に傳へられてゐる時、已に零本であつて、箱の
 裏に、その由が記されてゐる。

料紙は唐紙、四半切粘葉綴のものである。筆者については古くより源俊賴筆と傳へられてゐるが、實は行成卿五世の孫、定信朝臣の筆であると云ふ。

金澤本は御物になつてゐる以外に前田侯に卷三が四葉、團琢磨男、三井八郎右衛門男に卷四を各一葉宛所藏されてゐる。



金澤本萬葉集釋文

萬葉集卷第二

相聞

難波高津宮御宇天皇代

磐姫皇后思 天皇御作歌四首

或本歌一首

古事記歌一首

近江大津宮御宇天皇代

天皇賜鏡王女御歌

鏡王女奉和歌

内大臣藤原卿娉鏡王女時鏡王女贈内大臣歌

内大臣報贈鏡王女歌

內大臣娶采女安見兒時作歌
 久米禪師娉石川郎女時作歌
 大伴宿彌娉巨勢郎女時歌
 巨勢郎女報贈歌
 明日香清御原宮御宇天皇代
 天皇賜藤原夫人御歌
 藤原夫人奉和歌
 藤原宮御宇天皇代
 大津皇子竊下於伊勢神宮還上時大伯皇
 女御作歌二首
 大津皇子贈石川郎女御歌
 石川郎女奉和歌
 大津皇子竊婚石川女郎時津守連通占

露其事皇子御作歌
 日並皇子尊賜石川女郎御歌女郎字曰大
名兒
 幸吉野宮時弓削皇子賜額田王歌
 額田王奉和歌
 從吉野折取蘿生松柯遣時額田王奉入歌
 但馬皇女在高市皇子宫之時思穗積皇子
 御作歌
 勅穗積皇子遣於近江志賀山寺時但馬皇女
 御作歌
 但馬皇女在高市皇子宫時竊接穗積皇子
 之事既形而後御作歌
 舍人皇子御歌
 舍人娘子奉和歌

弓削皇子思紀皇女御歌四首

三方沙彌娶園臣生羽之女未經幾時臥病
作歌

石川女郎贈大伴宿彌田主歌

大伴宿彌田主報贈歌

石川女郎更贈大伴宿彌田主歌

大津皇子宮傳石川女郎贈大伴宿彌奈麻呂歌

長皇子與皇弟御歌

柿本朝臣人麻呂從石見國別妻上來時歌

二首並短歌

或本歌一首並短歌

柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子與人麻呂

相別歌

挽歌

後岡本宮御宇天皇代

有間皇子自傷結松枝歌二首

長忌寸意吉麻呂見結松哀咽歌二首

山上臣憶良追和歌

大寶元年辛丑幸紀伊國時見結松歌

近江大津宮御宇天皇代

天皇聖躬不豫之時太后奉御歌

一書歌

天皇崩後太后御作歌

天皇崩時婦人作歌未詳姓氏

天皇大殯之時歌二首

石川夫人歌

從山科御陵退散之時額田王作歌

明日香清御原宮御宇天皇代

十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首

天皇崩時太后御作歌

一書歌二首

天皇崩之後八年九月九日奉爲御齋會之夜

夢裏賜習御歌一首

藤原宮御宇天皇代

大伴王子薨後大來皇女從伊勢齋宮還

京之時御作歌二首

移葬大伴皇子屍於葛城二上山之時大來

皇女哀傷作歌二首

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂

作歌一首並短歌

或本歌一首

皇子尊舍人等慟傷作歌廿三首

柿本朝臣人麻呂獻泊瀬部皇女忍坂部

皇子歌一首並短歌

明日香皇子木庭殯宮之時柿本朝臣人麻

呂作歌一首並短歌

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻

呂作歌一首並短歌

或本歌一首

但馬皇女薨後穗積稷皇子冬日靈落遙望

御墓悲傷流涕御作歌

弓削皇子薨時置始東人作歌一首並短歌

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作

歌二首並短歌

或本歌一首並短歌

吉津采女死時柿本朝臣人麻呂作歌一首

並短歌

讚岐狹峯嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂

作歌一首並短歌

柿本朝臣人麻呂在石見國臨死之時自傷

作歌

柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首

丹比真人名擬柿本朝臣人麻呂之意報歌

或本歌一首

寧樂宮

和銅四季歲次辛亥河邊宮人姬嶋松原見娘

子之屍悲嘆作歌二首

靈龜元年乙卯秋九月志貴親王薨時歌

或本歌二首

相聞

難波高津宮御宇天皇代大鸕鷀天皇靈曰仁德天皇

磐姫皇后思イソノミコ天皇御作歌四首

君之行氣長成奴山多都彌迎加將行待

爾可將待

きみ可ゆ支けな可く那利ぬやまたづね

む可へか遊可むまらにかまた無し

右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉

如此許。戀乍不有者。高山之。磐根四卷乎。
死奈麻死物呼。
可く者可利こひつゝあらずば多可やまの
い者ねしま支て志那ましものを
在管裳。君乎者將待。打靡。吾黒髮爾。霜
乃置萬代日。
あ利つゝもきみをばま多むうち那びく
わ可くろかみ爾しも於き万よひ
秋田之。穂上爾霧相。朝霞。何時邊乃方二。
我戀將息。
阿支能多の本能うへ爾き利あひあさかすみ
い徒への可多にわ可こひやまむ
或本歌曰

居明而。君乎者將待。奴婆珠能。吾黒髮爾。
霜者零騰文。
わあ可してき見をばま多むぬ者たまの
わ可くろ可み爾しもは於くと毛
右一首古歌集中出
古事記曰。輕太子好輕大郎女。故其太子流
於伊豫湯也。此時衣通王不堪戀慕而追往
時歌曰。
君之行。氣長久成奴。山多豆乃。迎乎將往。待
爾者不待。
さみ可ゆ支介那可く奈利ぬやまたづ能
む可へをゆ可むまら爾はまた志
此云山多豆者。是今造木者也。

右一首歌。古事記與類聚歌林所說不同。歌主亦異焉。因檢日本紀曰。難波高津宮御宇。大鷦鷯天皇廿二年春正月。天皇語皇后。納八田皇女將爲妃。時皇后不聽。爰天皇歌以乞於皇后云々。卅年秋九月乙卯朔乙丑。皇后遊行紀伊國到能野岬取其家之御網葉而還。於是天皇伺皇后不在而娶八田皇女納於宮中。時皇后到難波濟。聞天皇合八田皇女大恨之云々。亦曰。遠飛鳥宮御宇雄朝孀稚子宿彌天皇廿三年春三甲午金庚午。木梨輕皇子爲太子容姿佳麗。見者自感。同母

妹輕太娘皇女亦艷妙也云々。遂竊通。乃怙懷少息。廿四年夏六月。御羨汁凝以作氷。天皇異之卜其所由。卜者曰。有內亂。蓋親々相奸乎云々。仍移太娘皇女於伊豫者。今案二代二時不見此歌也。近江大津宮御宇天皇代。天命開別天皇諡曰天智天皇。天皇賜鏡王女御歌一首。妹之家毛。繼而見麻思乎。山跡有。大嶋嶺爾。家母有猿尾。いも可いへもつぎてみ万しをやまとなる。於保しま三ね爾いへもあら満しを。一云。妹之當繼而毛見武爾。一云。家居

麻之乎。

鏡王女奉和御歌一首

秋山之。樹下隱。逝水乃。吾許曾益目。御念從者。
あ支やま能のした可くれ遊くみ徒づの
わ禮こ曾まさめみ於もふよ利は

内大臣藤原卿嫂鏡王女時鏡王女贈内大臣歌

一首

玉匣。覆乎安美。開而行者。君名者雖有。吾
名之惜裳。

たまくしげ於保ふをやすみあけてい可ば
きみ可なはあ禮とわ可なをしも

内大臣藤原卿報贈鏡王女歌一首

玉匣。將見圓山乃。狹名葛。佐不寐者遂爾。

有勝麻之目。

たま久しげみむ□とやま能さね可川ら
さねすはつひ爾あ利可てましや

或本歌曰。王篋三室戸山乃。

内大臣藤原卿聚采女安見兒時作歌一首

吾者毛也。安見兒得有。皆人乃。得難彌爲云。
安見衣多利。

わ禮者もやすらすらをえ多利み那ひとの
え可て二すといふやすらをえ多梨

久米禪師娉石川郎女時歌五首

水薦苙。信濃乃真弓。吾引者。宇真人佐備
而。不欲常將言可聞神師

みこも可るしなのまゆみわ可ひけば

うまひとさびといねとい者む可も
三薦苜。信濃乃真弓。不引爲而。強作留行
事乎。知跡言莫君二。郎女
みこも可るしなのまゆみひ可すして
しむざるわざをしる登い者那久爾
梓弓。引者隨意。依目友。後心乎。知勝奴鴨。郎女
あ徒さゆみひ可ばね可ひ爾よらめど毛
のちのこゝろを志利可ねぬ可も
梓弓。都良絃取波氣。引人者。後心乎。知人曾引。神師
阿づさゆ見つらをと利はげひくひとは
能ちのこゝろをしる人ぞひく
東人之。荷向徳乃。荷之緒彌毛。妹情爾。乘爾
家留香聞。神師

あ徒ま人能ゝざ支能者この二能を耳も
いも可こゝろ爾の利に介るか毛
大伴宿彌媽。巨勢郎女。時歌一首
大伴宿彌諱曰。安麻呂也。難波朝右大臣大
紫大伴長德卿之第六子。平城朝任大納
言兼大將軍。薨也。
王葛。實不成樹爾波。千磐破。神曾着常
云。不成樹別爾。
多ま可づらみ奈らぬき爾はち者やぶる
可み曾つくといふならぬきごとに
巨勢郎女報贈歌一首。即近江朝大納言巨勢人卿
之女也。
玉葛。花耳聞而。不成有者。誰戀彌有目。
吾孤悲念乎。

たま可づら者那のみさ支てみ那らずば

た可こひ爾あらぬわ可こひ於もふを

明日香清御原宮御宇天皇代天淳中原瀛真人天皇
諡曰天武天皇

天皇賜藤原夫人御歌一首

吾里爾。大雪落有。大原乃。古爾之郷爾。落

卷者後。

わ可さとに於保ゆ支布れ利於保者ら能

布利爾しさと爾布らまくはのち

藤原夫人奉和歌一首

吾岡之。於可美爾言而。令落。雪之摧之。彼

所爾。歴家武。

わ可を可能於可みにいひて布らしむ流

ゆ支能くだけて曾こにちる个む

藤原宮御宇天皇代

高天原廣野姫天皇諡曰持統
天皇元年丁亥十一年讓位□太子
尊號曰太上天皇也

大津皇子竊下於伊勢神宮上來時大伯

皇女作歌二首

吾勢枯乎。倭邊遣登。佐夜深而。鷄鳴露爾。

吾立所霑之。

布た利ゆけどゆ支す支可多支あきや万を

い可で可き見可ひと利こゆらん

大津皇子贈石川郎女御歌一首

足日木乃。山之四付二。妹待跡。吾立所沾。山

之四附二。

あしびきのやま能しづく爾いも万つ登

わ禮多ちぬれぬや萬の志川くに

石川郎女奉和歌一首

吾乎待跡。君之沾計武。足日本能。山之四

附二。成益物乎。

わ禮万徒とき見可ぬれ个むあしびきの

やまのしづくになら満しものを

大津皇子竊婚石川郎女時。津守連通占。

露其事皇子御作歌一首未詳

大船之。津守之占爾。將告登波。益爲爾知而。

我二人宿之。

お保布彌のつも利のうらにつけむとは

万さし爾志利てわ可ふ多利ねし

日置皇子賜石川女郎御歌一首女郎字曰大

大名兒。彼方野方野邊爾。荊草乃。東間毛。

吾忘目八。

お保なこがをち可多のべ爾可流久佐の

つ可多あひ多もわ可王寸れめや

幸千吉野宮時弓削皇子贈與額田 歌一首

古爾。戀流鳥鳴。弓絃葉乃。三井能上從。鳴濟

遊久。

い爾しへ爾こふると利可もゆづ類者の

み井のうへよ利な支わ多利遊久

額田王奉和歌一首從後京進入

古爾。戀良武鳥者。霍公鳥。蓋哉鳴之。吾念

流恭騰。

い爾しへにこふらんと利は本とゞぎ數

ましてや奈支しわ可こふること

從百野折取蘿生松柯遣時額田王奉入歌一首
三吉野乃。玉松之枝者。波思吉香聞。君之御
言乎。持而加欲波久
見よしの、多ま、つ能えは者しき可も
き見可みことをもちて可よ者久
但馬皇女在高市皇子宮時思穗積皇子御作歌一首
秋田之。穗向之所緣。異所緣。君爾因奈名。事
痛有登母
あ支能多の本ひけのよする可たよ利耳
き見爾よ利那、こと可たうと毛
勅穗積皇子遣近江志賀山寺時但馬皇女
御作歌一首
遣居而。戀管不有者。追及武。道之阿廻爾

標結吾勢。
於くれゐてこひつゝあらずは於ひゆ可無
みちのくまわ爾志めゆへ利わ可せ
但馬皇女在高市皇子宮時竊接穗積皇
子事既形而御作歌一首
人事乎。繁美許知痛美。已母世爾。末渡
朝川渡。
ひとごとを志げ見爾い多み於能可よ耳
いまだわ多らぬあさ可はわ多る
舍人皇子御歌一首
丈夫哉。片戀將爲跡。嘆友。鬼乃益卜雄。尙戀
二家里
ますらをやうたこひせん東奈げゝと毛

於爾の萬しうらなをこひ二ヶ利

舍人娘子奉和歌一首

嘆管。丈夫之戀。亂許曾。吾髮結乃。須而奴禮許禮。

弓削皇子思紀皇女御歌四首

吉野河。逝瀬之早見。須叟毛。不通事無。有

巨勢濃香毛。

よしの可はゆくせを者やみし者らくも

□ること那くあ利こせぬ可も

吾妹兒爾。戀乍不有者。秋芽之。咲而散去。花

爾有猿尾。

わ支もこ耳こひつゝあらずはあ支者き能

さ支てち利ぬる者那爾あら満しを

暮去者。鹽滿來奈武。住吉乃。淺庶乃浦爾

玉藻莉手名。

ゆふされ八し本みちきな无寸見よしの

あさ可能うらに多まも可利てな

大船之。泊流登麻里能。絶多日二。物念瘦奴

人能兒故爾。

於ほぶねのとまる東万利の多ゆたひ耳

もの於もひやせぬひとのこゆゑに

三方沙彌娶國臣生羽之女末經幾時臥病

作歌三首

多氣婆奴禮。多香根者長寸。妹之髮。比來

不見爾。搔入津良武香。三方沙彌

多けばぬれ多可ねばな可支いも可、見

こ能ごろみぬ爾み多利川らんか

人皆者。今波長跡。多計登雖言。君之見師
髮。亂有等母。娘子

ひと齒み那いまはな可し東多けといへ登

(この間十三首脱落)

い者みのや多可つ能やまのこ能まよ利

わ可ふる曾でをいもみつらん可

小竹之葉者。三山毛清爾。亂友。吾者妹思。別

來禮婆。

さゝの者、みやまもさやにみ多ると毛

わ禮八いもをしわ可れきぬれば

或本反歌四

石見爾有。高角山乃。木間從。吾袖振乎。妹

見監鴨。

い者み爾あるた可つ能やまのこの万よ利
わ可ふる曾でをいもみつらん可も

角障經。石見之海乃。言佐敵久。辛乃琦有。

伊久里爾。曾深海松生流。荒磯爾曾。王藻者。

生流。王藻成。靡寐之兒乎。深海松之。深目乎

思勝。左宿夜者。幾毛不有。延都多乃。別之

來者。肝向。心乎痛。念乍。願爲勝。大舟之。渡之

山之。黃葉之。散之亂爾。妹袖。清爾毛不見。隱有

屋上之上山云室山乃。自雲間。渡相月乃。雖惜。隱

比來者。天傳。入日刺奴禮。丈夫跡。念有吾毛。

敷妙乃。衣袖者。通而沾奴。

反歌二首

青駒之。足搔乎速。雲居曾。妙之當乎。過而

來計類來計留一云當者隱

あをこまのあ可支を者やみくも井爾所
いも可あ多利をす支てき爾介る

秋山爾。落黃葉。須叟者。勿散亂會。妹之當

將見一云知里勿

あ支やまに於つるもみちば志ばらく八
ち利那見多れそいも可見るべく

或本歌一首並短歌

石見之海。津乃浦乎無美。浦無跡。人社見

良未。滄無跡。人社見良目者。啖入師。浦者雖

無。縱惠夜思。滄者雖無。勇魚取。海邊乎指

而。柔田津乃。荒磯之上爾。數青生。玉藻息都

藻。明來者。浪已曾來依。夕去者。風已曾來

依。浪之共。彼依此依。玉藻成。摩吾宿之。敷妙
之。妹之手本乎。露霜乃。置而之來者。此道之。

八十隈每。萬段。願雖爲。彌遠爾。里放來奴。

益高爾。山毛超來奴。早敷屋師。吾孀乃兒我。

夏草乃。思志萎而。將嘆。角里將見。靡此山。

反歌一首

石見之海。打歌山乃。木際從。吾振袖乎。妹

將見香

い者みな流うつ多のや萬のこ能まよ利

わ可ふるそでをいもみつらん加

右歌體雖同。句々相替因此重載

柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子與人麻呂相

別歌一首

勿念跡。君者雖言。相時。何時跡知而加。吾不戀有牟。

於もふ那どきみはいへと毛あ者むと支
いつとし利て可わ可こひざらむ

挽歌

後岡本宮御宇天皇代無豊財重日足氣天皇讓位
後即後岡本宮

有間皇子自傷結松枝歌二首

磐白乃。濱松之枝乎。引結。眞幸有者。亦

還見武。

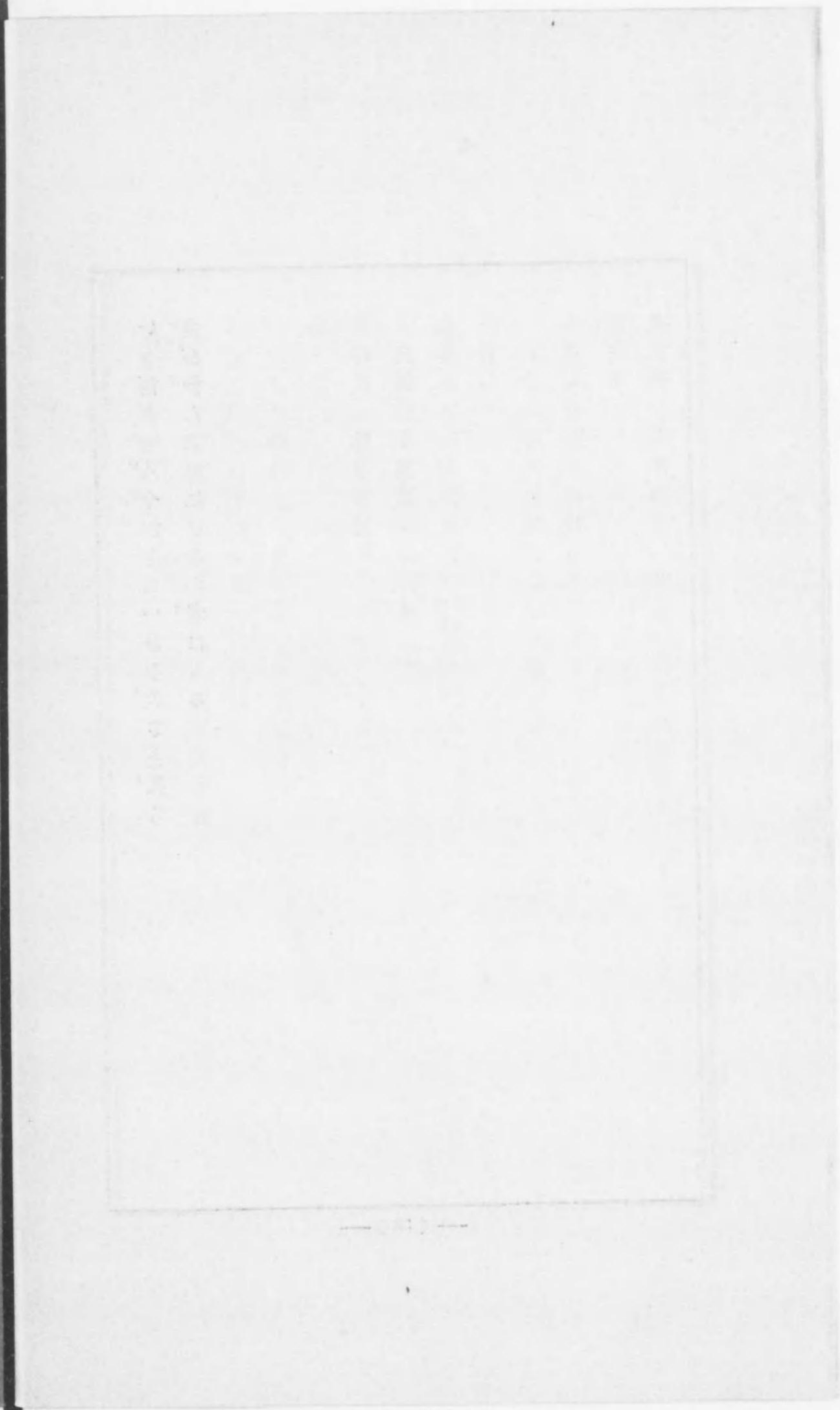
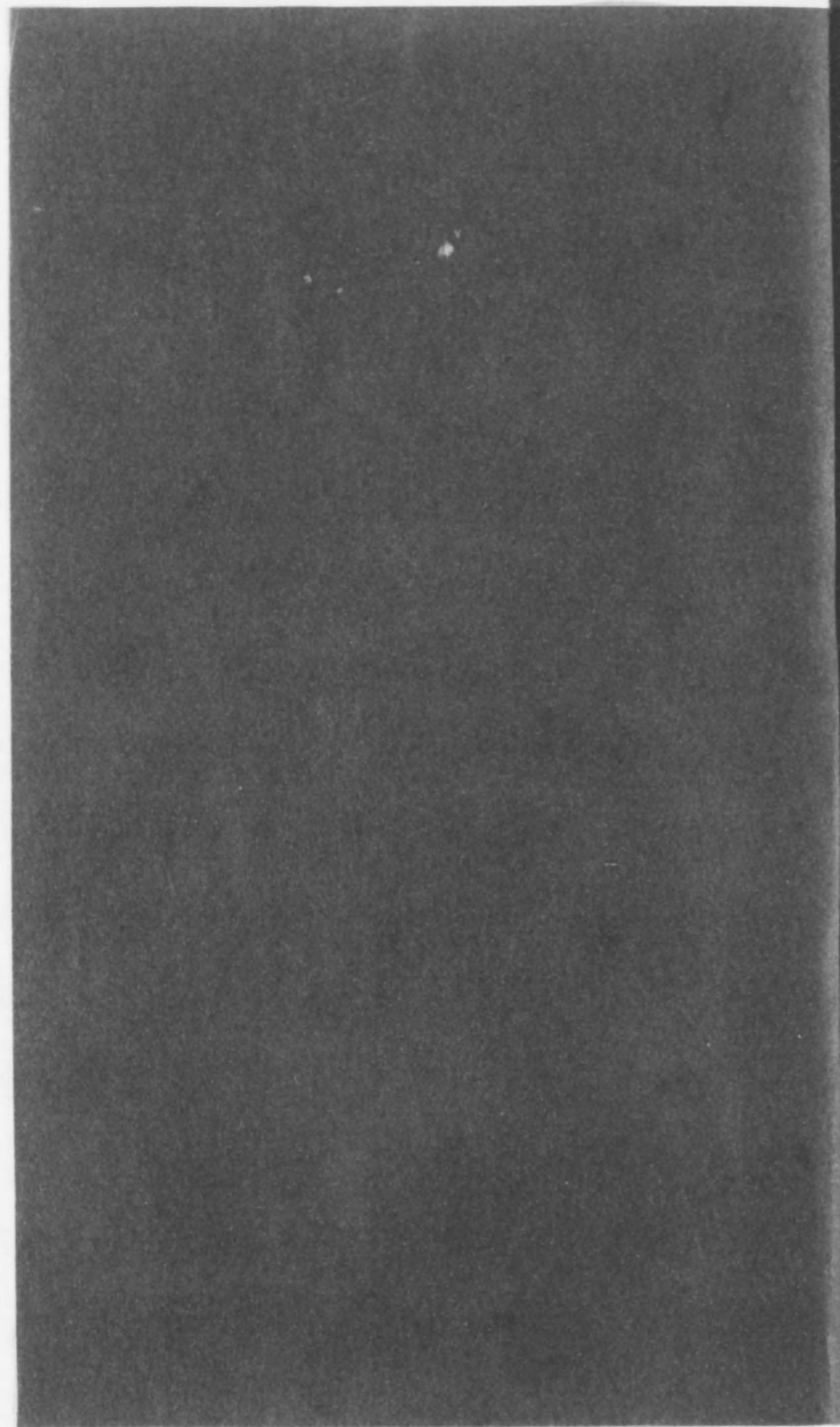
いはしろの者まゝ徒のえをひ支むすび

まさし久あらばまた可へ利見む

家有者。筒爾盛飯乎。草枕。旅爾之有者。

惟之葉爾盛。

いへ爾あ禮八個爾もるいひを久さま久ら
多び爾しあればしひの者にもる



昭和十年三月廿五日印刷
定價金貳圓參拾錢

東京市下谷區中根町七二 武田墨彩堂
編輯者 かな名蹟全集刊行會
代表者 武田基一
發行人 武田基一
印刷人 黒川秀藏
東京市東區西馬場一丁目一六〇

發行所 東京市下谷區中根町七二 武田墨彩堂
電話 根原三三七番
郵便 根原六〇五四八番

かな名蹟全集刊行會
第五回配本
金澤萬葉集(天)

萬葉集卷第二

相引



難波高津宮御宇天皇代

磐姫皇孫思天皇御作歌一首

或奉歌一首

古事記歌一首

近江大津宮御宇天皇代

天皇賜鑄王女所歌

鏡王女奉和詩

内大臣藤原御姊鏡王女時鏡王女贈出下歌

内大臣額贈鏡王女歌

内大臣娶妻女安見况時作歌

久米禪師姊石川郎女時歌五首

大伴宿禰姊巨勢郎女時歌



巨勢郎女報贈歌

明日香清原官女宇天皇代

天皇賜藤原夫人出哥

藤原夫人和歌

藤原官女宇天皇代

大津皇子竊下於伊勢神宮還上時大泊皇

女所伴歌三首

大津皇子贈石川郎女所歌

石川郎女奉和歌

大津皇子竊婚石川女郎時津守連迺古

露其寺中皇子所伴歌

日並皇子尊賜石川女郎所歌

女郎字曰大
名肥

幸吉野宮時分削皇子賜額田王歌

額田王和歌

後吉野於取羅生松村造時額曰王奉入歌

但馬皇女在馬市皇子宮之時思德積皇子

御作歌

勅德積皇子逃於色江志願山寺時但馬皇女

御作歌

但馬皇女在馬市皇子宮時病接德積皇子

之事既形而後御作歌

舍人皇子御歌

舍人娘子御歌

弓削皇子思紀皇女御歌一首

三方沙弥娶園生母之女未經及時臥病

作歌

石川女郎贈大付宿祢田之歌

大付宿祢田之歌贈歌

石川女郎更贈大伴宿禰歌

大津皇子宮傳石川女郎贈大伴宿禰麻呂歌

長皇子與皇弟出歌

柿本羽人麻呂後石見國別妻上木時歌

二首 并注奇

或奉歌一首 并注奇

柿本羽人麻呂妻依羅娘子女與人麻呂

相別歌

挽歌

後思古宮法皇天皇代

有間皇子自傷結松枝歌三首

長志寸意吉麻呂見結松氣咽歌三首

山上巨憊良道和歌

大濟元年事吉吉比伊國時見結松歌

近江大津宮法皇天皇代

天皇在躬不豫之時大后所作歌

一書歌

天皇崩後大后所作歌

天皇崩時物人作歌 未詳姓名

天皇大彌之時二首

大后所作

石川夫人歌

從三科所陵退散之時額田王作歌

明日香清御原宮法皇天皇代

十市皇女薨時高市皇子尊所作歌二首

天皇崩時大后所作歌

一書歌二首

天皇崩之後二年九月八日在方所齋會之夜

夢裏習賜詩歌一首

藤原宮法宇天皇代

大津皇子薨後大津皇女後河野麻呂送

京之時法作歌二首

移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大津

皇女哀傷法作歌二首

日丘皇子尊殯宮之時栞在羽人麻呂

作歌一首并送号

或平歌一首

皇子尊命人木協傷作号廿二首

栞在羽人麻呂歌泊津部皇女忍坂部

皇子号一首并送号

明日香皇子木庭殯宮之時栞在羽人麻

呂作号一首并送号

高市皇子尊城上殞官之時栉率部人麻呂作歌一首 并送号

或本歌一首

但馬皇女薨死後穗積皇子冬日雪落送時街莫悲傷流涕山作号

弓削皇子薨時皇后作歌一首 并送号

栉率部人麻呂妻死之後泣血哀慟作

歌二首 并送号

或本歌一首 并送号

吉備津采女死時栉率部人麻呂作歌一首

并送号

讚岐狹路崎視石中死人栉率部人麻呂

作歌一首 并送号

栉率部人麻呂在石見國臨死之時自傷

作歌

柿中胡人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首

丹比去人同撰柿中胡人麻呂之妻作歌

或作歌一首

寧樂宮

和銅四年歲次辛卯河内宮人姬崎松原見嫌

子之流悲嘆作歌二首

靈龜元年乙卯秋九月志貴親王薨死時歌

或作歌二首

相同

難波高津宮法皇天皇代 大饒鶴天皇謚仁德天皇

磐姫皇太后思天皇時作歌一首

君之新氣長成奴山夕都祢道加打打詩

余可打詩

いふらゆきけすくはわわあつね
むらりむらりあつねあつね

右一首歌の上信良に類聚歌林載す

如此許意下不有者高山之磐根曰美乎
死な麻死物乎

うくもろわいひつあつねあつね
いそねしあつねあつねあつね

任官蒙君中女お侍打麻者里縁今霜
乃置為代日

あつねあつねあつねあつねあつね
わくろろろろろろろろろろ

秋田之穂上今露相初霞何時也乃方ニ
我忘好息

いそねあつねあつねあつねあつね

いほつたのうにわろいやはい

或年歌曰

居明而君辛未得奴婆珠能吾里候介
霜共更騰父

わあろーしきらそはまふしぬらたまの
わくろろろよーしははくしん

右一首右号集中出

古事記曰輕太子新羅太子女故其太子流
於伊豫湯也其时衣田王不堪忘慕而出
時号曰

君之行氣長久成奴山々豆乃近乎得待
余若不得

きふゆまらぬくまもわやまらたれ
ひろをゆふしまららけまた志

此云山少皇者是今述本夫也

右一有号古事記與類聚歌林所記
不同号之之異号因檢日本記難波
高津宮法字大鶴鶴天皇女三年春
正月天皇語皇后納八田皇女為妃
时皇后不聽者天皇号以乞於皇后
廿年妹九月乙卯朔乙丑皇后遂行紀

伊國利熊野甲其家之清思榮而
遷於是天皇伺皇后不在而娶八田皇
女納於宮中时皇后利難波瀆同天
皇合八田皇女大恨之

亦曰遠飛鳥宮法字雄胡孀稚子宿祢
天皇女三年春三月甲午朔庚午木梨
輕皇子为太子容姿佳麗見者自感同母

鏡王女奉和法歌一首

秋山之樹下 隱照水乃者 淨言空自幽念 徒然
あまのやまに けしきたうくれば せくみは
われこころあまのめが けしきたうくれば

内大臣藤原卿持鏡王女時鏡王女贈内大臣
一首

玉匣覆之安美用 而得若君若若 雖有若

若之信裳

たまぐさけしきたうくれば せくみは
あまのめが けしきたうくれば

内大臣藤原卿持鏡王女時一首

玉匣乃見因山乃 狭名為依不深 大遂余
有勝麻之目

たまぐさけしきたうくれば せくみは

七ノ女はついでありてしあしや

或女子号曰玉蓮二字名にんら乃

内下藤原卿娶妻女女見記時作号一首

吾夫も也女見時有清人乃時致余存之
女見夜多利

わねえしや、すらまをさしもふれいふの
らうてにすといふやすらまをさし

久未禪師妙石川郎女時号又一首

水落刻信濃乃去ら各引共字真人依備
而不欲常得言可同 禪師

み、しりりしらのまゆみわ、ひけけ
うしあひとく、いとはとほとほし

三善刻信濃乃去ら各引為而強作百
事字知跡言真君二 良女

みこしうりしたのまゆみひびきし
しむせいのやをしうやいしぬくま
梓うり共随意依目な後心争知勝奴鴨 新女
あはれゆみひくはけいしよふくま
のらんらんをせかろねぬも

梓うり共随意依目な後心争知勝奴鴨 新女
あはれゆみひくはけいしよふくま

はらみのころをしうらんきんく

東人之意向蓮乃花之供余色妹結余妻
家節音同 新女

あはれゆみひくはけいしよふくま

大付宿社持巨坊郎女時うらる

大付宿社持は女麻呂也難波胡太巨大

世天付長徳候之弟之子平城羽仁命
言魚大ね軍も亮也

玉鳥實不成樹余波千般破神曾看常
云不成樹別余

とま一とある〜ねきうけら〜やあ
うみう〜く〜りよな〜ねき〜と

巨城郎女報贈一首 巨城郎女

玉鳥花耳聞而不成有女誰云余有日
吾孤亦念之

た〜り〜つ〜と〜い〜の〜み〜せ〜う〜し〜み〜め〜ら〜す〜け
〜ら〜い〜ひ〜あ〜い〜あ〜い〜い〜い〜い〜い

明日香清池原宮御宇天皇代 天海中原流世人天皇

天皇賜藤原夫人御歌一首

吾里余大雪落有大原乃古今く柳余落

美若後

竹のこゝろにたのむしきわがねを
多かりしとよみかゝらまゝくはれり

藤原夫人寿和一首

吾思之於可羨余言而今落雪之權之彼
所余慶家武

わがこゝろにたのむしきわがねを

ゆゑにたけしうらむらむらむ

藤原宮治宇天皇代 高天原底野指天皇證曰於統

天皇九年丁亥上二年讓位於太子
尊号曰大上天皇也

大津皇子竊下於伊勢於宮上未時大泊

皇女出作歌二首

吾勢祐子後とを登依夜深の鶴鳴霞本

吾之所需之

わらせ...ふもふ...つも...と...
あふ...つ...わ...わ...
二人...難...秋...何...
...ゆ...す...あ...
...き...ら...さ...ゆ...

大津皇子婚石川郎女御一首

是日本乃...四付二...
之四附二

あ...い...あ...
わ...ら...わ...わ...の...
石川郎女奉和一首

吾...待...君...之...
附二...
わ...ら...は...ま...ら...わ...
わ...ら...は...ま...ら...わ...

かまのしんくいならふ

大津皇子禰婚石川郎女時津守まゆ古

露其事皇子清作号一有未詳

大船之津守く日余將告登波蓋為余知而
我二人宿之

かぬちのりかーりかうーにけむとけ
こしーしんかてわーうまゆ

日直皇子賜石川女郎清号一有

女郎字日大
石見也

大名兒彼方野を日余刺草乃束之同毛

昔忌日八

かぬちのりかをらふよあづまのいふくはか
つらあいらしわ。ますわあや

幸平吉野言時ら刺皇子贈與額田口三三

古余志流る時ら活染乃三并能上後鳴活

遊久

いりーつよふらとあるしゆらぬの
ら井のうーつらわらうわらわら

額田王和歌一首

後集東遊入

古今意良武鳥老霍之鳥蓋我鳴之者念
流其騰

いりーつよふらとあるしゆらぬの
ら井のうーつらわらうわらわら

後吉野栢社薩生松栢寺時額田王和歌一首
三吉野乃玉松之枝老波思昔香同君之流
言中栢而加欲波久

いりーつよふらとあるしゆらぬの
ら井のうーつらわらうわらわら

但馬身女在馬市皇子宮時三穗積皇子馬皇一首

秋田之德向乃可縁思可縁君今日念名事
痛有登母

あふれこのむしけのよすらふるも
きつらふもあはれもさうし

勅穂積皇子送色江志賀山子时但馬皇女
漸作一首

巻居向三志賀山不有若出及武運之阿也今

標結者場

かくれがし... あし子はたし...
あまのくらまわ... さあゆらわ

但馬皇女高市皇子子时竊様穂積皇
子事既成而此作一首

人事之難美許知痛美し母女今未渡
羽川渡

いとよき志けりしはみだりし
いまたわすれぬあはれはたし

舎人皇子法号一首

丈夫成行志ねる跡嘆か思乃蓋ト雄尚三
二家司

あ守らるるはたしと人よたけし
たふらうをなをいひし

舎人皇子法号一首

嘆か官大夫之志礼許曾者疑治乃須必知礼計礼
弓削皇子思記皇女法号一首

芳野河遊瀬之早見酒東毛不因事し
巨勢濃香向

ふし力はけゆきとやな
ふし力はけゆきとやな

吾將見今忘下亦有若秋芽之嫩而物也
尔有猿尾

わししにりしにしつあすはあしちん
ちしてちちねもわあし

暮を共塩は未を武位告乃浅底乃浦余
玉深刺手名

中ちかかーかろくしすかーの

あまふうしにまどちん

大船之泊流登麻里能流夕日二物念瘦奴
人能况故余

おほしゆめのとまろまのゆたに
おほししやてわじよのゆたに

三方沙弥聚團は生れぬ女未信来付即病

三才二管

石見今有高角山乃木間後各神振辛妹
見監鴨

いふ今あるたうにやまのふりやう
たうあううをりしん

角障徑石見之海乃言依故久言乃埒有
伊久里今曾深海松生流蒸磯今曾玉流
生流玉流成麻疎之記今深海松乃深目手

思騰在宿夜若赤色不有近郊夕乃別
未若肝向心平病念下取乃騰大舟之渡乃
山く昔葉乃救之礼今妹神清今色不見隱有
屋上乃 一言字 山乃自雲間渡相月乃唯惜隱
此未去天傳入日刺奴礼丈夫路念有赤色
教姪乃衣神若面而治奴

及新二言

依浪之共彼依此依玉深成麻吾宿之叔妙
之妹之手今中露霜乃直而之未若此道之
八十限每為所限雖為疎遠今里放未奴
益高余山色起未奴早投屋呼吾媪乃此我
夏草乃思志萎而為嘆角里初見麻此山

反三一首

石見之海打歌山乃木際後吾振袖手妹

初見香

いそみなるけうう了あやふれはれんか
わさあううとをりみ了んか

右歌體雖同句之相替因此重載

柿本朝人麻呂妻依羅娘子與人麻呂相

別三一首

句念跡君头唯言相对何时跡初而加吾不

急有年

おしよのときみけのつともしあらは
つとをわつしと

枕歌

後思存官出守大皇代

無量時守日足姫天皇謙信
後守後思存官

有同皇子自傷治松枝号二首

磐石乃瀧松之枝争川治とて有光と

還見哉

い何一るのちまはけのうをいし
あもくあははあたうもらん

家有光与余盛飯草枕標余之有光

権之葉余盛

いつあははらういをくま
よいあははらういをくま

301
10

昭和十年三月二十日印刷
昭和十年三月廿五日發行
定價金貳圓參拾錢

東京市下谷區中區町七二
發行所 武田圖書發行會
東京市下谷區中區町七二
電話 三三七七
電報掛號 六〇五五八

六卷
（本配回五第）
（一）集葉萬澤金

編輯者 武田基一
代印者 武田基一
發行所 武田圖書發行會
印刷人 川秀一

終